

氏名	小代仁美
学位の種類	修士(看護学)
学位記番号	修士第95号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文題目	小児看護学実習において看護学生が子どもと人間関係を形成するために影響する要因

## 論 文 内 容 要 旨

※整理番号	99	(ふりがな) 氏 名	おじろ ひとみ 小 代 仁 美
修士論文題目	小児看護学実習において看護学生が子どもと人間関係を形成するために影響する要因		
<p>1. 目的：小児看護学実習において看護学生が感じる子どもとの人間関係形成に影響する要因を明らかにする。</p> <p>2. 方法：看護系の大学で看護学を学び、小児看護学実習を終了した、看護学生 9 名を対象とした質的帰納的研究。</p> <p>3. 結果：面接内容から逐語録を作成し、意味内容ごとに文節を区切り 1,532 の意味項目を抽出した。KJ 法の手法を取り入れ分析し、7 の上位カテゴリー、18 の中位カテゴリー、51 の下位カテゴリーが抽出された。上位カテゴリーは、【看護学生自身の力】【看護する責任】【患児の姿】【親の存在】【医療者の存在】【場の条件】【不安の先取り】である。</p> <p>4. 考察：看護学生のレジネスとして、【看護学生自身の力】と【看護する責任】があった。看護学生は、このようなレジネスをもって、小児看護学臨地実習に望み、患児と関わっていた。そして、看護学生は、《病室の状況》と《関わりの時間》という【場の条件】を確認しながら、患児へ関わる行動をとっており、患児の側にいる【親の存在】に気遣いし、看護学生にとって接しやすい《親の雰囲気》により、患児との関わりを容易にさせていた。また、その時に、患児と親との《親子の絆》に看護学生が入ることに戸惑いを感じ、＜親の助け＞を得ることで、患児との関わりを促進させていた。また、看護学生は、《患児の状態》や《患児の反応》を確認しながら関わり、患児の＜看護学生の容認＞が、その関わりを促進させていた。そして、関わりやすと感じた【患児の姿】は【看護学生自身の力】、【看護する責任】を強化した。さらに、看護学生にとって【医療者の存在】は、大きかった。一方、【場の条件】によっては、患児との関わりを後退させ、【不安の先取り】になり、患児との関わりが足踏み状態のままであった。また、【親の存在】にも壁を感じ、患児との関わり行動へ移行できないでいた。そして、それが【不安の先取り】へ働き、ますます、患児との関わりを足踏みさせることになっていた。また、【患児の姿】に患児との関わりの自信を失くし、【不安の先取り】に作用し、患児との関わりを後退させていた。また、【医療者の存在】は、看護学生のレジネスに重圧をかけ、【看護学生自身の力】、【看護する責任】への抑圧に働く場合もあった。</p> <p>5. 総括：看護学生が子どもと人間関係を形成するために影響する要因として、7 の上位カテゴリーが抽出された。この結果から小児看護学の基礎教育として次のことが考えられた。(1)小児看護学の臨地実習以前に、看護学生が子ども理解や子どものイメージ化ができるような学習体制と子どもの看護技術の実践能力がつく教育を行っていくこと。(2)看護学生が、看護者としての目標を定めていけるような指導を行っていくこと。(3)小児看護学実習において、指導教員が先導して臨地指導者を含めた看護師が共同し、看護学生が子どもと関われるような支援、助言、モデル提示が必要であり、看護実践では、看護学生の看護能力不足を補うこと。</p>			

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。